

2009年4月

白やピンク色の桜で埋めつくされる吉野山の風景は言葉では表現できないほど美しい。月ヶ瀬の川面に映る桜は、まるで美しい油絵を見ているようである。しかし、奈良には吉野山に引けをとらない素晴らしい一本桜が点在していることを忘れてはならない。地元のお寺や神社には堂々とした桜が植えられている。宝蔵寺の枝垂桜もその一つで、その存在が人々の歴史や生活を象徴している。

日本の古謡「さくらさくら」は、元々「咲いた桜」という歌詞がついており、琴の子供用練習曲として作られた曲である。今日この美しいメロディは尺八でもよく演奏されている。先週、吉野にある妙法寺でこの曲を演奏した。尺八古典本曲の演奏も楽しんでもらえたようだが、「さくらさくら」を演奏すると観客全員が大合唱となった。人々を一体にするこの曲の力を改めて実感した。日本文化、日本の美を象徴する曲として「君が代」ではなく「さくらさくら」を国歌とすべきだという意見もあるほどである。

他の伝統日本芸術でも珍しくないことだが、この曲は原曲の作者が不明である。昔は誰が作った作品なのかということにこだわらなかったという慣習を示しており、とても興味深く感じる。芸術家の多くは、自分達は自然や超自然力の流れを芸術という枠の中に収める手段でしかないと信じていた。同様に、彼らは個人を超越した存在の中では小さい存在でしかないことを理解していたし、また伝統音楽の流派内では1メンバーでしかないと認識していた。だから作品に作者の名前を残す必要がなかったのである。一本桜が孤立していないのと同様に、芸術家、詩人、音楽家は完全に1人ではない。様々な自然の要素に根深く依存しているのである。

桜の木の根元に宿る神にお酒を振舞うという古来の儀式に由来する“お花見”は、今では日本社会における重要な行事の1つになっている。しかし、“花より団子”ということわざがあるように、桜を愛でることよりも宴会を楽しんでいる人の方が多いようである。従来お花見は詩人や哲学者、庶民が集って桜の美しさとその儂さについて語り合う場であったことを覚えておいて欲しい。今年のお花見では少し足を止めて桜に見入って欲しい。そしてその桜の儂い美しさを自分に置き換えてみて欲しい。暗く感じるかもしれないが、風が吹けば桜の花びらが散るように、人の人生もふと終わるのだという儂さを知ること、この一瞬を有難く全うすることができるのではないだろうか。

4月24日19:00～平城京跡特設会場で行われる平城遷都祭2009にて泉川秀文と尺八ライブを行います。尺八と電気音楽による“咲く良”と、童謡の“さくらさくら”も演奏しますので是非お越しください。